

2 栽培技術のポイント

(1) 主要作型

栽培体系	1			2			3			4			5			6			7			8			9			10			11			12		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下			
雨よけ栽培			○						▲																											
半促成栽培																																				
促成栽培																																				
作業名	○：播種、▲：定植、□：収穫																																			

図2 湘南ポモロンの主要作型

(2) 生理・生態を活かした栽培の特徴

- ① 葉が小さくスリムな草姿で、果実に直射日光が当たりやすい。強日射・高温は裂果や着色不良（日焼け果）、リコペンの生成不良の要因となるため、雨よけ栽培では、遮光シート、散乱光フィルム等を活用する。また、上段の側枝を伸ばして茎葉で果実への直射日光を遮ることも有効であるが、混み過ぎないように注意する。
- ② 茎の太さは大玉品種と同程度、草勢は中～強である。
- ③ 花数は、花房あたり6～10花程度着生する。50～80gの長円筒型の果実を果房当たり5～6果着果させる。雨よけ栽培では、開花後約45日で収穫可能となる。
- ④ 雨よけ栽培のように高温や土壤水分が不足しやすい環境条件では尻腐れ果が発生しやすいので、灌水不足、カルシウム欠乏に注意する。カルシウム溶液の葉面散布も有効である。すじ腐れ果は比較的少ないが、過繁茂による光線不足、窒素過多、多灌水に、促成・半促成栽培では夜温を下げすぎないように注意する。
- ⑤ 根腐萎凋病、褐色根腐病及びネコブセンチュウには抵抗性を持たないので、Tm-2α型のToMV抵抗性因子を有する市販の複合抵抗性台木用品種を利用する。
- ⑥ トマト黄化葉巻病に対して抵抗性を持たないので、タバコナジラミ対策を徹底する。

(3) 土づくり及び施肥技術

- ① 土づくりは、完熟堆肥(2t/10aが目安)、土壤改良資材を定植1か月前に施用し、耕うんして土とよく混和しておく。土壤改良資材は、土壤診断に基づき施用する。なお、家畜ふん堆肥は、クロピラリドを含有している可能性があり、トマト等のナス科作物では、生育障害を起こすため注意が必要である。
- ② 基肥施用量は、N成分で12.0kg/10aを目安とする。有機質肥料を使用する場合は、定植15～20日前に全面施用し、耕うんする。
- ③ 追肥として、N及びK₂Oを生育期間中に2回程度施用する。施用量は、N成分で合計3kg/10aを目安とする。

表1 施肥基準

(10a 当たり)

	基肥	追肥①	追肥②	合計
N	12.0kg	1.5kg	1.5kg	15.0kg
P ₂ O ₅	25.0kg	—	—	25.0kg
K ₂ O	12.0kg	1.5kg	1.5kg	15.0kg

(4) 播種・育苗管理

【播種】

- ① 野菜用育苗箱に条まき、または、128 穴セルトレイに播種する。プライミング処理をしていないので、播種後は、出芽するまで 28℃を目安に加温する。出芽後は、最高 25～28℃、最低 15～18℃を目安とする。
- ② 接ぎ木する場合、「湘南ポモロン」は発芽がやや不揃いであるため、やや多めに播種する。また、茎が細いので、台木品種より3日程度前に播種する。

【育苗】

- ① 鉢上げ後は、育苗期間の前半は昼温 25℃を基本とし、最低夜温を 18℃→15℃→12℃と徐々に下げていく。後半は昼温 20℃、最低夜温 10℃を目安に、やや低めの温度で管理して、定植1週間前には定植するハウスの温度に馴化させる。
- ② 大玉品種に比べて節間が伸びやすいが、徒長を抑制する場合は、灌水量ではなく、温度管理で調整する。大玉品種では定植前に灌水を控える傾向があるが、「湘南ポモロン」では、尻腐れ果の発生を助長するおそれがあるため、控えすぎないようにする。
- ③ 育苗期の肥培管理は、大玉品種と同様とし、育苗後半に肥料切れしないように注意する。

(5) 定植

- ① 無加温の雨よけ栽培(3月下旬～4月下旬定植)の場合は、トンネル等で保温する。
- ② 雨よけ栽培では、第1花房開花前、本葉7～8枚で定植する。購入苗(ポット苗)の直接定植も可能である。促成・半促成栽培では、第1花房が2～3花開花頃に定植する。
- ③ 栽植密度は、畝間 180cm×株間 30cm、2条植えて 3,700 本/10a を目安にする。
- ④ 定植1週間前にはマルチを展張して、地温 15～18℃を確保する(雨よけ栽培:黒マルチまたは白黒ダブルマルチ、促成・半促成栽培:透明マルチ)。植え傷みがないように根鉢は崩さず、やや浅植えにする。特に、接ぎ木苗の場合は、接ぎ木部分が地面に接しないように植える。

(6) 定植後の管理

【温度管理】

- ① 大玉品種と同様とする。雨よけ栽培では、最高最低温度計を設置して、昼間は 24～28℃を目安に換気を行う。5月中旬以降は日射に応じて遮光シート(白色、遮光率 50%)を展張する。

【灌水方法】

- ① 定植前に十分な灌水を行い、定植後は少量多灌水を基本として土壤水分を一定に保つ。雨よけ栽培では、5月以降の灌水は大玉トマトよりこまめに行い、萎れないように注意する。
- ② 雨よけ栽培では、1株あたり第6段果房収穫前は 0.5L/日、第6段果房収穫開始後は 1L/日を目安とする(地下水位など土壤条件によって調整する)。

【誘引・芽欠き】

- ① 定植後、直ちに支柱を立てて誘引する。直立1本仕立てを基本とする。誘引作業が遅れると、茎葉が混んで、作業量が増加し、落果することもある。
- ② 腋芽(わき芽)は早めに除去する。傷口を速やかに乾かすため、作業は晴天日の日中に行う。
- ③ 摘葉は、第1果房の下葉をかく程度とする。雨よけ栽培では、第7果房の上2葉を残して摘心する。この2葉の基部から発生する腋芽(わき芽)を伸ばすことで、上段果実の日よけにできる。



図3 スリムな草姿

【着果管理】

- ① ホルモン処理の場合は、1花房3~4花開花時に成長点にかからないように噴霧する(1回/花房)。
- ② 各果房の着果数は5~7果を目安とし、花数が多い場合は摘果する。傷果や病害虫被害果などは早めに摘果する。

(7) 収穫

- ① 生食用の果実は、青もぎをせず、しっかり完熟させてから収穫する。生果の出荷は M サイズを目安とする。また、ジュース等加工向けの果実は、裂果対策も兼ねて、着色 50%以上で収穫した後、室温(20℃程度)で追熟させる方法もある(5-(1)参照)。

表2 出荷規格の目安

サイズ	L	M	S
果重	80g 以上	80g 未満~60g 以上	60g 未満

(8) 生理障害

① 尻腐れ果

カルシウムが土壌に十分存在していても、窒素過多や高温・乾燥等により根が傷み、土壌中のカルシウムを吸収できなくなると発生しやすい。対策として、灌水を抑制せず、少量多灌水により土壌の乾湿の差を小さくする。

② 裂果

土壌水分の急激な変化や強日射、高温、結露等により発生しやすい。少量多灌水、遮光や UV カットフィルム等の利用が必要である。

③ 着色不良果

夏期の強日射及び高温、土壌乾燥等により、日が当たった果実表面がケロイド状になる日焼け果、果実の肩部が緑色のまま着色が進まないグリーンバック果等の障害が出やすい。夏期の栽培では、上段の腋芽(わき芽)を残して果実を葉の陰に隠すことや、遮光、高温時の灌水等の対策を行う。



図4 尻腐れ果

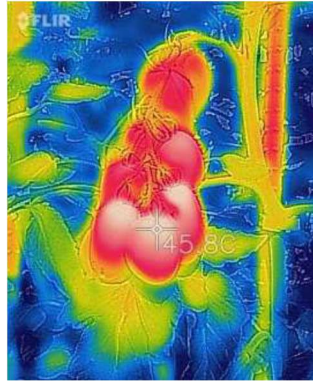


図5 直射光下の果実
表面温度(測定値:45.8°C)



図6 グリーンバック果